

西南学院大学 ESS100 年史

井上 康市

2023 年、本学 ESS（正しくは「E.S.S.」と標記しなければならないが、ここでは「ESS」と略する）は創設 100 周年を迎えた。機会を与えていただいたので、ESS 及び ESSOB 会について過去 100 年間の主な出来事を振り返る。

1. ESS 創設 100 周年記念行事の開催

ESSOB 会の名簿には 1950 年卒から 2023 年卒まで 1,000 人強の会員が登録されている。1923 年創設以来の先輩諸氏を加えると 1,200 人程の部員が当 ESS を巣立って行かれたものと推測される。

創設 100 周年の節目に際し、1 年以上の準備期間を費やし 2023 年 10 月 14 日（土）、記念行事を開催した。OB 参加者は福岡他九州各県、関東関西地区、及びその他各地から 150 人、現役部員は 30 人程であった。後日 ESSOB 会関東支部でも 40 人の会員が参加し同様の祝賀会を開催した。行事一連の内容は以下の通りである。

(1) 本学内キャンパス・ツアー

100 人以上の OB 参加者があり、現役部員によるガイドにて本学各施設を見学した。長年本学を訪れた事のない OB 会員も多く、在学時の昔を感動と感激を以て回顧されていた。特に部室は懐かしく、またチャペルに寄せる思いは格別との声が多かった。後述するが、ESS 年中行事であるシェイクスピア英語劇を 28 回公演したのは、現チャペル改築前のランキン・チャペルであった故である。

(2) 西南学院百年館における記念式典

式典は、ESSOB 会 74 期高見純一会長の格調高い英語による挨拶で開始した。続いて本学からの来賓である北垣徹副学長に祝賀挨拶をいただいた。さらには OB 会顧問 70 期井上より、パワーポイントを使い ESS 及び同 OB 会 100 年間の主な出来事について解説を行い、その後第 100 代 ESS25 期渡辺翔大委員長が最近の活動状況について

て説明を行った。

(3) 記念祝賀会

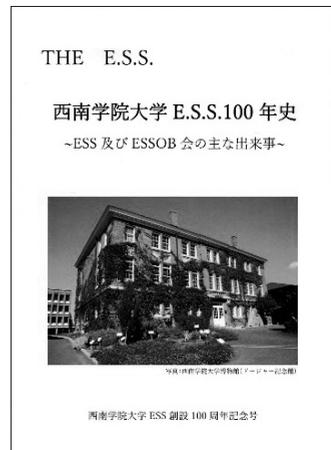
西南クロスプラザ2階レセプションホールにおける2時間半の祝賀会は、来賓且つ当 ESSOB 会会員でもある74期蒲原由和大学同窓会専務理事（当時）からの祝辞及び乾杯の音頭により開会し、大盛會に終始した。會場の廊下及び隣接テラスには100年の歴史を物語る多くの各種資料及び在学時代の各期写真が所狭しと展示され、それらを閲覽し過去を偲び旧交を温める大勢の姿が印象的であった。

最高齢は60期85歳、最年少は現役27期18歳であり、和やかな雰囲気の中で時空を超えた交流が出来たのは100周年行事ならではの感動的な光景であった。

(4) 「西南学院大学 E.S.S.100 年史」の発行

ESS 及び ESSOB 会100年の歴史を記録に残し、今後のさらなる発展に資するべく記念誌を発行した。資料としてはOB 会役員会保存資料、部室内保存資料、さらには多くのOB 会員からの提供資料、及び聴き取り資料を収集できたが、年代間にばらつきがあった点は否めない。

特筆すべき貴重な資料としては、ESS 生みの親、育ての親である Alma O. Graves 教授の語録集である「So Hallow'd and So Gracious Is the Time」及び「THE E.S.S. 40 周年記念号」がある。これらについては後述する。



ESS100 年の歴史を記録した記念誌

2. 初期の ESS

1921 年、本学の前身である西南学院高等学部が開設され、その2年後の1923年、現在の ESS の前身である「English Literary Society」が創設された。提唱者は本学教師 Baker 先生であり、創設の趣旨は西洋文化、キリスト教についての理解促進であった。主たる活動内容は英会話練習ではなく、英語詩の鑑賞、古典音楽鑑賞、宗教劇等であった。本学2代目院長である C.K. Dozier 先生のご夫人である Maude Burke Dozier 先生が活動の中心であり、複数の先生と学生が一体となって活動をしていた。2年後、クラブ名称は現在の「English Speaking Society」に変更された。

活動内容の例として、当時年に一度開催されていた「The Annual Public Meeting

of the ESS of Seinan Gakuin College (1926.1.30)」の内容を以下に紹介する。

Part 1:

Opening address by Dr Bouldin

Piano Solo: Valse Op.42. (Chopin) Miss Hannah

Recitation: "Sympathy" by Foss T. Shinagawa

Speech: Mosul H. Hatta

Recitation: Decision H. Tanaka

Vocal Solo: "The Arrow and the Song" (S.C. Colburn) ... Miss Fulghum

Speech: The Life of George Elliot S. Ozaki

Recitation: The Barrel-Organ by Alfred Noyes K. Nakamura

Trio: "Intermezzo Sinfonico" (P. Mascagni) Miss Baker, Mr. T. Iseda,
Mr. Y. Muta

Part 2:

Vocal solo: "Come Unto Me" (Win Coenen) Miss Fulghum

Recitation: "The Raven" by E.A. Poe H. Ikeda

Speech: A Clever Man T. Miwa

Speech: On Koizumi Yakumo Y. Matsui

Piano Solo: A. Country Gardens (Granger)

B. Military Polonaise (Chopin) Miss Hannah

Recitation: The Power of Habit T. Nagata

Speech: On Thought and Action K. Hamada

Trio: Cavatina (J. Raff) Miss Baker, Mr. T. Iseda,
Mr. Y. Muta

The decision of judges

Closing Address by President Dozier

当時の部員数は10人ほどであり、活動には複数の native speaker の先生方が参加され、贅沢な英会話練習環境であった事が想像される。しかも、掲記 meeting には当時の院長も参加されており、大学と ESS の密接な協働関係が窺える。

因みに初代 ESS president は、後に西南学院中学校、同高校初代校長、及び同大学第10代院長を務められた伊藤俊男氏である。同氏と ESS 同期の河野貞幹氏は第7代院長であり、また、第15代院長、第7代学長を務められた田中輝雄氏も ESSOB である。

初期の部員数は既述の通り少人数であったが、英会話熱が活発になった1960年代には新入部員数が100人程となり、総部員数は200人を超えるようになった。しかし、2000年頃には部員数は数十人程に減少した。

3. Alma O. Graves 教授の登場

Graves先生は東京における2年間の日本語教育受講の後、1938年西南学院高等学部へ着任され、同時にESS顧問に就任された。「In the summer of 1938, I arrived on the campus of Seinan Gakuin. It was love at first sight.」とは先生の言である。

先生はESS顧問の他、キリスト教宣教師、教授、詩人、Shakespeare研究者、華道家という多面性をお持ちである。1968年には本邦勲四等瑞宝章の叙勲を受けられ、また1976年には名誉教授を授けられた。第二次世界大戦中7年間は離日を余儀なくされたが、その間を含め1977年離日されるまでの41年間、先生はその人生の大半を本学及びESSに献身的な尽力をなされた。

以下Graves先生の足跡の一部を掲載する。



Alma O. Graves

(Graves先生の直筆のサイン)

(1) 英語劇公演

1949年から1976年までの間、ESSは28回の英語劇独立公演を行った。各年の演

1	1949	They that sit in Darkness
2	1950	The Merchant of Venice
3	1951	Romeo and Juliet
4	1952	The Dark Victory
5	1953	The Merchant of Venice
6	1954	Julius Caesar
7	1955	As you like it
8	1956	The Taming of the Shrew
9	1957	Macbeth
10	1958	The Twelfth Night
11	1959	Romeo and Juliet
12	1960	The Merchant of Venice
13	1961	Othello
14	1962	King Henry IV

15	1963	Midsummer Night's Dream
16	1964	Julius Caesar
17	1965	Hamlet
18	1966	The Twelfth Night
19	1967	Othello
20	1968	Romeo and Juliet
21	1969	The Taming of the Shrew
22	1970	Macbeth
23	1971	As you like it
24	1972	Othello
25	1973	Hamlet
26	1974	The Merchant of Venice
27	1975	Richard III
28	1976	The Twelfth Night

日は前ページ掲載の通りである。第1回及び4回を除き、全て Graves 先生 監督の Shakespeare 劇であり、主な配役も先生が選考された。英語は古い Shakespeare 英語であり、cast にとっては台詞の意味把握も暗記も容易ではない。劇を後方で支える大道具、小道具、衣裳、音響、照明、会計担当のビジネス各部門も難行苦行の準備に明け暮れた。英語劇は約半年を費やす全部員参加の年間最大行事であった。入場料もいただいたが、予算が少ないため衣裳や小道具では Graves 先生から提供いただく事も少なくなかった。

例外を除き、公演は本学内旧ランキン・チャペルにおける1回限りの公演であり、もったいないとの声も少なくなかった。

英語劇で特筆すべきは、1967年 KBC テレビ「ティー・タイム・ショー」で Graves 先生が69期今村善亮 stage manager と共に出演され、同年公演した「Othello」を例にとり英語劇を紹介された事である。これは、当時 KBC テレビに勤務されていた当 OB 会 61 期横野英雄氏の協力によるものである。



Othello の 1 シーンを実演



Graves 先生とともに KBC テレビに出演

(2) Garrott 杯、Dozier 杯 contest

1950年、Graves 先生の suggestion で Garrott 杯争奪 recitation contest を開始した。3年後には内容を oratorical contest に変え、全国大学 ESS へも参加者募集を行った。2024年には75回に至る。記録が残る52回の内、本学優勝回数は17回であり、他大学では慶應義塾、関西学院、早稲田、京都、立教、神戸、立命館の順に続く。1967年には Dozier 杯争奪 recitation contest を開始し、現在も続いている。

(3) 「Ah, Seinan !」「She wants brave, noble men」の作詞

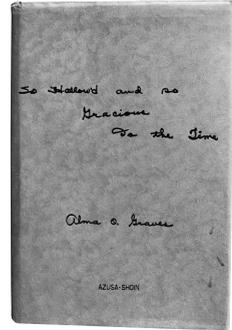
1951年、本学 Glee Club 顧問を兼務されていた Graves 先生は、Glee Club からの要請により上記2曲を作詞された。作曲は当時「題名のない音楽会」で名を馳せた石丸寛氏である。以後、ESS、同 OB 会では「Ah, Seinan !」が頻繁に歌われた。

(4) Fukuoka city-wide ESS

1951年 Graves 先生の英会話指導を希望する福岡在3大学、九大、福教大、福岡女子大からの要請で「Fukuoka city-wide ESS」が設置された。毎週100人ほどが本学に集まり Graves 先生指導の下、英会話の練習が行われた。年に一度は、4大学合同の「English Play Festival」も開かれた。

(5) Graves 先生語録集の製本

Graves 先生は1976年定年退職し帰国された。その際、当OB会53期豊田佳日子氏、54期斉藤幸雄氏、55期田中輝雄氏、61期石川修一氏によって、先生在日中に書かれた書簡をまとめ「So Hallow'd and So Gracious Is the Time」が発行された。ESSの歴史を知る上でも貴重な資料である。



ESSの歴史を知る上で貴重な Graves 先生の語録集

4. 「第5回マッカーサー元帥杯全国英語 oratorical contest」53期豊田佳日子氏優勝

1951年大阪で開催された掲記 contest において豊田氏が優勝の栄冠に輝いた。2位南山大学、3位関西学院大学であり、神戸大、一橋大、東大、早稲田大なども参加した。優勝トロフィーが初めて九州に渡り、凱旋した博多駅では Garrott 院長、Glass 教授、本学自治会、ESS 部員、新聞記者などの賑やかな大歓迎を受けた。「西南の英語」「英語は西南！」の名声は、これを機に益々高くなった。



写真左端が優勝した豊田氏

5. 「THE E.S.S 西南学院大学 E.S.S40 周年記念号」発行

1963年は ESS 創設40周年であり、これを記念して「THE E.S.S」^(ママ)の創刊号(次ページ写真参照)が発行された。本誌には ESS 創設から40年に至る歴史が記載されており、投稿者は当時の古賀武夫学長、Graves 先生、初代 president 25期伊藤俊男氏(旧制高等学部文科)、53期豊田佳日子氏、55期田中輝雄氏他である。

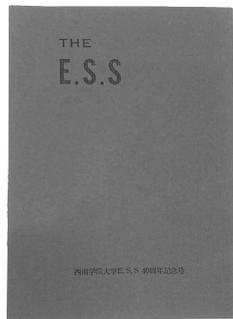
現在の ESS 執行委員会は、正副委員長、書記、内政部、外政部、会計部等で構成さ

れているが、その原型はこの時期に制定されたものである。

この時期、他大学 ESS との交歓会を開き交流を図る Good will meeting が存在した。本学 ESS が提唱し、この交歓会組織を発展させ発足したのが、現在も続いている F.S.E.A. (Fukuoka Students' English Association) である。発足時のメンバーは本学、九産大、九大、福教大、福岡女子大、福大の 6 大学 ESS であった。

Good will meeting の活動は関西地区同志社大学、関西学院大学との交流にも発展し、その後の関東、関西遠征の基礎となった。

なお、「THE E.S.S.」はその後不定期に発行されており、歴史の記録として貴重である。



ESS の貴重な記録誌

6. ESSOB 会の組織化、及びその活動内容

(1) OB 会の組織化、名簿作成

1966 年、ESSOB 会を組織化し ESS 執行委員会に ESSOB 会担当役員を設置した。以前は正月三カ日、OB 諸氏が三々五々 Graves 先生宅を訪れ、現役女性部員の手伝いも得て OB 相互の懇親を深めていた。部員及び OB の増加に伴い十分な対応が難しくなったため、OB 会を組織化し正月 2 日に市内ホテルにて OB 会総会を開催する運びとなった。

同時に「ESSOB 会会員住所録」を作成し、50 期から 69 期まで合計 206 人の登録を行った。その後名簿は Excel 資料に変換し現在 1,000 人を超えるに至っており、物故者を勘案すると 900 人ほどが実在会員数であると推測される。

歴代 OB 会会長は次の諸氏である。

初代	53 期	豊田佳日子
第 2 代	71 期	寺崎 富繁
第 3 代	54 期	大内 和臣
第 4 代	61 期	桜木 和雄
第 5 代	68 期	西村 一
第 6 代	74 期	高見 純一
第 7 代	87 期	安河内 暁



1989 年 11 月に行われた ESS OB 会

(2) OB 会活動—福岡本部

最近の主な行事は、毎年秋開催の OB 会総会、及び 3 月卒業式前開催の新入 OB 会員歓迎会である。

OB 会総会は、2009 年以降本学内「西南クロスプラザ」にて開催されている。内容は過年度事業報告、会員によるスピーチ、及び懇親会であり、過去の実施内容詳細は本稿巻末資料をご参照願う。

新入 OB 会員歓迎会は、ESSOB 新人が OB 会に親しみを感じ OB 会活動への積極的参加を促す意図で 2014 年に開始した。記念品として Dale Carnegie 著「人を動かす (How to win friends and influence people)」を毎回贈呈している。現役部員支援は大切な活動であり、その一環として Garrott 杯、Dozier 杯両コンテストには毎年一定金額の協賛を行っている。

また、2016 年西南学院創立 100 周年行事に際しては、当 OB 会として 30 万円の寄付を実施した。西南学院百年館（松緑館）1 階の壁面寄付者名簿には「西南学院大学 ESSOB 会」の名前が刻印されている。

(3) OB 会活動—関東支部、北九州支部

支部としては現在、関東支部、北九州支部が存在する。

関東地区における OB 会は 1960 年代から随時開催されていた。現在の関東支部は 2010 年に発足し、その後毎年秋に総会を開催している。初代支部長は 70 期原田秀夫、第 2 代は 74 期天本吉樹、現在は 75 期北島義政の各氏である。

北九州支部は 2014 年に懇親会を開催し、その後も引き続き開催している。初代支部長は 71 期松平豊、現在は 87 期佐々木茂臣の両氏である。

(4) Graves 基金、及び社会人英語スピーチコンテスト

1977 年、Graves 先生は 70 歳で定年を迎え帰国された。本学創立 40 周年を迎える 1989 年、Graves 先生に再来日していただく企画が持ち上がった。ESS を代表して当時の田中学長が 8 カ月に亘り Graves 先生と交信された。当初実現しそうであったが、結果は「Just age!」の理由で不成功に終わった。かかる交信の経過中、先生の再来日費用を捻出すべく OB 会に寄付を募ったところ、215 人から多額の寄付が集まった。その寄付金である Graves 基金活用方法につき種々論議した結果、全九州社会人向け英語弁論大会を開催する事となった。

第一回大会は 1992 年 10 月福岡アクロス円形ホールにて開催され、当 ESSOB73 期山崎俊幸氏が優勝の快挙を飾った。コンテストには毎回九州各地から多数の応募があ



優勝した山崎俊幸氏 (ESS・OB73 期)



コンテスト各賞トロフィー

り、選考を経て 10 人程の参加者による大会となった。大会は 12 回開催した。

7. section meeting の開始

1968 年、ESS の daily activity として section meeting を導入した。経緯は次の通りである。従来、諸大学 ESS 間対外試合は discussion、speech、debate の 3 形式で行われ、当 ESS からの contestant は都度選出していた。ところが関東遠征の際分った事は、関東地区 ESS では上記各 3 形式に分化した section meeting が daily activity の中心となっている事実であった。そこで当 ESS でも 3 つの section meeting を採用し、現在も続いている。

英語力向上、各種 contest 勝利のためには、他大学動向に関する情報収集と素早い対応が不可欠であるとの認識を得た出来事であった。

8. 西南シンポジウムの開催

ESS の新たな活動として、1974 年第 1 回西南シンポジウムが開催された。guest として、当時本邦英会話教育で一世を風靡した國弘正雄氏の招待に成功した。テーマとして「Internationalization」を掲げ講演及び本学教授、部員を含めた panel discussion を行った。

この企画の背景は次の通りである。先ず、3 年後の 1977 年には Graves 先生が定年により帰国される事である。先生が不在となれば英語劇の継続開催が危うくなる。年間最大行事である英語劇がなくなると、それに代わる企画が必要ではないか。

次に、当時関東在学 ESS においては、英語力向上の一環として英会話教育界著名人を招き、講演、討論等の行事を開催している由。当 ESS でも同様の企画が必要ではないかとの議論がなされた。

以上が背景であり、翌年以降もこの企画は続けられ本年 2024 年には 45 回目の開催

となっている。これまで開催されたシンポジウムの詳細内容は巻末資料をご参照願う。テーマ、guest 共に多岐に亘っており、各年代部員の創意工夫と努力が垣間見えて心強い。

9. オンラインによるクラブ活動の展開

2019 年末から 2022 年までの間、新型コロナウイルス感染症が全国的に蔓延し、社会行動が制限された。大学では対面活動が制限され、入学式、卒業式が非開催、在宅オンライン受講が一般化し、ESS の日常活動もオンライン活動に移行した。大学間でもオンライン上の contest 組織が形成され、その結果会場に足を運ぶことなく遠方大学 contest への参加が容易になった。当 ESS 主催の Garrott 杯、Dozier 杯両 contest も 3 年間 zoom 開催であった。対面活動が可能となった現在では、オンライン活動と対面活動の併用がなされている。

新入部員勧誘においても Instagram、X（旧 Twitter）の公式 account が設定され、入部の玄関口となっている。オンラインを活用した活動は今後益々進展するものと思われる。

10. ESS の今後の発展を期して

以上、ESS 及び ESSOB 会 100 年の主な出来事を概観してきた。総じて言えることは、ESS は各年代において英語力向上に努めると同時に、他地区大学の ESS 動向にも気を配り、その時期に適切な変革を企画し邁進してきた事である。さらには、福岡、ひいては九州の ESS を常にリードし、「西南 ESS」の名を高めて来た事は真に誇らしい事であった。

ESS 及び OB 会会員の絆は強固であり、密接な交流によりそれぞれの人生を豊かにしている。次の 200 周年に向かって、今後益々の発展を期するばかりである。

資料—福岡本部総会、及び西南シンポジウムの詳細

福岡本部総会			
開催日/司会		スピーチ	その他プログラム
2008/11/9	71期 星野佳代子	My Experience of ESS	75期 中島淳一(劇団エーテル主催)一人芝居
09期 佐藤晴恵	73期 棚町順子	ESS/English and Us	69期 末松行子、ギタリスト穴井侘二によるピアノ弾き語り
			ESS現役によるトリオ演奏
			会計報告(74期 石津清博:以後の会計報告は全て同氏)
			現役活動報告(10期 國頭はるか)
2009/10/25	74期 蒲原由和	新聞人生45年	会計報告、現役活動報告(11期 福山統一)
09期 佐藤晴恵	72期 高由紀子	波瀾万丈 女の半生	
2010/10/24	65期 近藤いと	出遭いは人生の宝	本学紹介DVD放映
97期 清水洋輔	82期 小嶋哲	本学国際交流の現状と将来像	会計報告、現役活動報告(12期 坂口安津美)
2011/10/8	70期 井久保敏信	中華圏+3を渡り歩いて—ESSはいかに役に立ったか	本学紹介DVD放映
97期 清水洋輔	82期 小嶋哲	本学現状紹介	会計報告、現役活動報告(13期 井上健太)
2012/12/1	70期 井上康市	ESSのルーツGraves先生の軌跡	本学紹介DVD放映
97期 清水洋輔	82期 小嶋哲	本学現状紹介	北九州支部、関東支部活動報告
			会計報告、現役活動報告(14期 真砂千尋)
2013/9/28	67期 古海真典	住宅関連業界での45年間	本学紹介DVD放映
08期 尾形慶	09期 佐藤晴恵	ESSと私	北九州支部、関東支部活動報告
			会計報告、現役活動報告(15期 本多真弥)
2014/9/20	76期 石川昭仁	私のESS体験と今時の大学教育	本学紹介DVD放映
04期 今村満弘	10期 國頭はるか	ESSで学んだ事	北九州支部、関東支部活動紹介
			会計報告、現役活動報告(16期 加治佐洋人)
2015/9/19	73期 山本廣毅	ESS活動における学びと人材育成の結びつき	本学100周年記念に関するESSOB会からの寄付についての報告
04期 今村満弘	09期 佐藤晴恵他	ESS活動成果と現在職業	ESSOB会会則改定について
			会計報告、現役活動報告(17期 坂本大輔)
2016/10/30	09期 光達彩香	ESS活動における学びと仕事への結びつき	北九州支部、関東支部活動報告
04期 今村満弘	12期 坂口安津美	ESS活動が私にもたらした変化	本学100周年記念式典等DVD放映
	97期 清水洋輔	本学現状紹介	会計報告、現役活動報告(18期 井上耕太郎)
2017/10/28	73期 山崎俊幸	運命の出遭い! ESSと私	北九州支部、関東支部活動報告
04期 今村満弘	13期 中川葉摘	I am what I am thanks to ESS	会計報告、現役活動報告(19期 林和也)
2018/10/27	77期 山長龍磨	英語と仕事の関わり — ディベートが力になった	北九州支部、関東支部活動報告
04期 今村満弘	12期 森下茉莉子	ESSで得たもの	会計報告、現役活動報告(18期 太田朝香)
2019/9/21	04期 高橋理恵	35才からの外国語習得経験談～メキシコ生活とその後～	北九州支部、関東支部活動報告
70期 原田秀夫			現役活動報告(21期佐々木滋哉)

(敬称略)

西南シンポジウム

回	開催年	主題	主賓、講演	panel discussion 等	協賛
1	1974	Internationalization	國弘正雄 TV 英会話講師	國弘正雄、シェパード先生、吉武 (66 期)、ベイラー大学助教授、他計 7 人によるパネルディスカッション	JISU、本学同窓会、ブリタニア、Mainichi Daily News、FSEA
2	1975	日本人と英語	東後勝明 早稲田大学教授	講演、質疑応答	
3	1976	日米コミュニケーション	西山千 同時通訳者	米国文化センター館長、シェパード、ホートンによる講演及び質疑応答	外語総合研究所、日本航空、JISU、Mainichi Daily News
4	1977	Logic in English Communication	Carl Becker debate champion	PD: ウイスコンシン大学教授、シェパード、九大大学院生	JISU、FSEA
5	1978	what is forensics	Dr Melon Umass	講師レクチャー、米国人大学生 2 人によるモデルディベート、Melon、Becker、Shephard 各先生審査	
6	1979	How to alleviate Intercultural Gap	Shila Ramesy ICU 助教授	講師、本学日本人教授、高校英語外人先生、留学生	米国文化センター、JISU
7	1980	How to practice logical way of thinking	岩下貢 日米コミュ・セン所長	debate、レクチャー	米国文化センター、JISU
8	1981	more successful persuasion in public speaking	Edward Stewart ICU 助教授	講師講演、質疑応答、モデルスピーチ (ESS2 名)、説得の観点からのコメント	米国文化センター、JISU
9	1982	英語の発音と英語教育	中津燎子 未来塾顧問	講演、質疑応答	米国文化センター、International Language Services Inc
10	1983	To be more persuasive	C.A.Holeman Forensics Ass. 副所長	学長挨拶、講演、質疑応答	西日本新聞社、西南大生協、ILU
11	1984	A holistic approach to interpreting	塚平リタ ICU 助教授	講演、質疑応答	西日本新聞社、西南大生協、ILU
12	1985	Forensics: An effective way to successful communication	松本茂 国際武道大学助教授	講演、質疑応答	
16	1989	異文化間におけるコミュニケーション論	荒木昌子 NHK 国際放送アナ	講演 90 分、質疑応答 30 分	
18	1991	meaning and expressiveness in English and Japanese	Mark Peterson	講演、質疑応答	
21	1994	発想から学ぶ英語	松本道弘 名古屋外大教授	講演 100 分、質疑応答 50 分	福岡県、福岡市
23	1997	イデオムの表現力 —日本語と英語の間	Mark Peterson	講演 60 分、質疑応答 40 分	福岡県、福岡市、福岡市教育委員会

回	開催年	主題	主賓、講演	panel discussion 等	協賛
24	1997	異文化間コミュニケーション	鍋倉健悦 獨協大学教授	60分講演、45分質疑応答	福岡県、福岡市、 福岡市教育委員会、 本学、FSEA
25	1998	21世紀の異文化コミュニケーション・コンピタンス	今堀義 本学教授	75分講演、30分質疑応答	福岡県、福岡市、 福岡市教育委員会、 本学、FSEA
26	1999	3人の講師による異文化に関する講話		北九大大学院卒 (native)、 本学助教授 (native)、小さな 国際交流の会代表日本人、 各30分、質疑応答10分	
29	2002	二人の講師による対談 「The well of different cultures」		Lyall Landry (ラジオ佐賀)、 櫻井聖子 (劇団GIGA ボラン ティア) 質疑応答は随時	福岡県、福岡市、 福岡市教育委員会、 西日本新聞社、 本学、FSEA
30	2005	the magic of movies 映画を通して英語を学ぶ		中島千春、クリストファー・ チェイス (本学教授)	福岡県、福岡市、 福岡市教育委員会、 西日本新聞社、 本学、FSEA
31	2006	世界のCM フェスティバル			
32	2007	Jazz discovers the secret	川寄弘詔 九大大学院研究員		
34	2012	Cross-cultural bridges! ～映画で学ぶ異文化～	ベニントン和雅子 本学文学部助教授		
35	2014	Communication in English as Lingua Franca: Our Attitude, Goals and Study	中島亨 福教大教授		
36	2015	Introduction of Japanese Culture to the World	前田結花 通訳・翻訳者		
37	2016	What is usual? What is normal? ～異文化視点から考える当り前～	清宮徹 本学英語専攻教授		
38	2017	グローバル・ワーク・コミュニケーション	田中十督： 西南学院中学・高校 教諭		
39	2018	アメリカの外来種、移民、人種主義	山元里美： 本学英語専攻准教授		
40	2019	自と己の曖昧な境界	大松康 産の森学舎理事長		

※回数が連続していないのは資料不足のため

(敬称略)